
怪異帖

志冥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪異帖

【Nコード】

N5973Y

【作者名】

志冥

【あらすじ】

新米刑事である、よりがしゆんすい依賀春水と彼が所属する特殊事件捜査課、通称怪異課の捜査顧問、またらめひるな駁目蛭茄が常識では考えられない不思議な事件の数々を解決していく。そして、その裏に隠された真実が徐々に明らかになる。

溢れ出る鮮血、飛び散る臓物。

彼の前で起こるそれは《怪異^{かいい}》と呼ぶに何の不足もなかった。

怪異の口元から滴り落ちる血液は青年の前で波紋を広げる。

迫り寄る異形の者の腕は毛むくじやらで、顔は醜悪にして、口元には鋭い牙が覗く^{のぞ}。

青年は、地響きを起こさんばかりに震える足を無理やり足を押さえつけ、その場から逃げ出した。

逃げても逃げても、怪異が後を追ってくる。

そんな気がした。

目の前の曲がり角を曲がれば、大通り。

恐怖にすぐわれそうになる足をバタつかせる様に前へ。

しかし、自分の視線に移るのはその胴体。

首のない胴体だけが前へ前へと大通りへと向かう。

振り向くつもりもないのに、振り向かされた自分の視線は怪異の醜悪な顔の前。

鋸^{のいば}の様に規則正しく並べられた鋭い歯が無数に生える口の中が段々と迫ってきて、彼の視界は闇に閉ざされた。

彼は薄れゆく意識がやっとの事で状況を理解した。

首を切り取られた自分は既に死んでいて、後はその意識を刈り取られるだけなのだ。

視覚も触覚も既に働かない中で、最後は残った聴覚が捉えたのは、大きな飴を噛み砕くような頭蓋の割れる音。

青年は毎日悪夢と共に目覚め、眠ると共に悪夢を苛まれる。起き上がれば、そのじつとりと濡れた寝巻が不快に身体に纏わり付く。

まるで大蛇に巻きつかれているようだ。

そんな表現が正しいか、なんて考える事はない。

怪異の溢れた悪夢を皮肉る為だけに、そんなあられもない例えを態々《たびたび》使っている。

青年は幽霊や、化け物、妖怪と言った怪異を心から嫌っている。物心つく前から見続けてきた夢の所為。

そんな夢を見る原因なんてものは、勿論知っている。父親のせいである。

青年の父は科学者だった。

ほとんど父と会話した事がなかったので、どんな人間かはよくは知らないが、周りからは《妖怪博士》なんて格好の悪い呼ばれ方をしていた事は知っている。

そんな、怪異大好きな父親は青年が物心つく前に、眠る前の青年に怪異についての話を聞かせたのだ。

寝る前に絵本を読んであげる様な、そんな風に。

母に因れば、それが青年の悪夢の原因。

しかし、そんな原因を作った父親も青年が中学に上がる頃に蒸発してしまった。

青年はあまり落胆はしなかった。

いつか、そんな事になるだろうと思っていた。

ほとんど家に寄り付かない父が消えた所で、思春期を迎えた多感な

少年時代を送っていた青年には最早、関係のない事だった。

時は流れ流れて、青年も大人になり、今ではすっかり社会人。制服に着替えて、家を出る。

不快な目覚めで億劫おっくうな気分が爽やかな風と朝日で少し和らいだ気がした。

彼は去年までは交番勤務だったが、念願かなって本日より刑事となる。

破天荒はつたんぼうな父親への反抗心からか、自分は絶対に真つ当な仕事に就くと、父親が蒸発してから二年後の中学三年生の秋に誓った。

「えっと、ここを　　右か……」

「っと、うわ。」

迷路の様な警察署の通路を曲がった所で激しい衝撃を感じて、その場に倒れ込んだ。

傷むお尻を擦りながら正面を見ると、ピンクだった。

正確には女性と思われる物体が大腿を開いて天を仰いで横たわり、開かれたしなやか脚を目で追っていくと、そこにピンクがあったのだ。

レースが大量に施された、ピンクのパンツ。

「ちよ、え？　　すみません。」

焦って顔を隠すが、指の隙間を空ける事は忘れない。

ピンクを凝視するが、女性が起き上がる気配を感じない。

「あの？　大丈夫ですか？」

青年が覆いかぶさる様に女性の顔を窺うと、女性は閉じていた目を急に見開いた。

「君は依賀君か？ 依賀春水君か？」

「そ、そうですけど……」

「ならば、付いて来い。依賀捜査官」

「ちよ、ちよっと待つて下さい。」

しかし、青年の訴えは空しく聞き流され、引きずられる様に警察署の地下駐車場へと連れて行かれ、押し込まれる様に止めてあった高そうな黒いセダンに乘せられた。

「一体何なんですか？」

怪訝けげんそうな顔をしている青年を尻目に、答える様子もなく、白衣の女性は運転しながらチューブ状のゼリーを、口一杯に含んだ。

その女性はよく見てみると、健康的な褐色の肌が身に纏まとう白衣とは対照的で、大きく出ている胸や臀部をより強調して浮き立たせている様だった。

目鼻立ちははつきりとしており、日本人の様だが、瞳は漆黒に少し緑がかった様な不思議な色をしている。

「君もどうだ？」

差し出されたゼリーを「結構です。」とあえて怒った様子で断るが、本当は色気のある美人に突然攫さらわれて、怒りよりも喜びと下心が脳と心、そして下半身を占拠している。

女性は急ブレーキで車を止め、「降りろ」と促した。

警察署からはそう遠くないそこは、大通りから一本外れた路地だった。

物々しい【KEEP OUT】キプアウトと書かれた黄色のテープに鼓動が少し早くなった。

「ほれ。」

黄色テープを跨またぎながら女性が青年に手袋を放り投げた。

女性の短いスカートが跨いだ拍子に捲れ上がり、再びピンクと僅かながらの再会を果たす。
青年を睨み付ける女性が手袋を付けると言いたいのは、言われる前に分かった。

いまいち掌にしっとり来ない手袋を上げ下げしつつ、恐る恐る近づいて行くと、血の様な紅い斑点が所々にあり、さらに鼓動を加速させた。

少し行つた所には巨大な血だまりが広がっている。

加速していた鼓動が一度大きく弾んで、一瞬止まった気がした。

「な、何ですか……これ。」

「さあな、そのヒントがこの先にある。」

所々に散らばる毛髪。

血まみれの衣服。

そして、そこに横たわる人であった、と思われる物。

胃から何かが駆けあがってくる。

「絶対に吐くなよ。」

白衣の女は、そう言つて青年の首を力いっぱいに締めた。

口を抑えながら、何度も頷く青年にため息交じりにその手を離す。

「これは 爪痕か？」

見るも無残な肉塊に近づいて女は傷口を調べ始めた。

何かを呟きながら、遺体を見続けた後、周囲の遺留品を調べ始める。

青年は只管に口を抑えながら、その後は張り付いていた。

「爪で引き裂かれる様な傷口に、牙で引き千切られた様な傷口……

さらには現場に残された獣の体毛……。ルー・ガル……。」

「またも、引きずられる様にして警察署に連れ戻された青年は配属先の部署にやつとの思いで到着する事ができた。」

『特殊事件捜査課』と入り口に書かれた古ぼけた扉を開けて中へ。

「そこが君のデスクだ。依賀捜査官。」

女性は視線も向けずに、木の台を指す。

上にはビーカーやら、試験管やらが乱雑に置かれていて、とてもではないがデスクの役目を果たす場所とは思えない。

兎にも角にも、持ってきた荷物をビーカーと試験管を少しずつずらして作ったスペースに置く。

「本当なのか……、いや、しかし……」

遺留品の幾つかを半ば無理矢理持ち帰ってきた女性は戻るや否や、顕微鏡の様な物で観察したり、妙な液体に漬けたりし始めた。

「あおう……」

「これは興味深い……」

「あの……」

「……そうか、そういう事か。」

「あの！」

「ん？ 何かね？ 依賀捜査官。」

「この課の事とか、貴方の事とか、まだ何も教えてもらっていないのですが。」

「しばし暫し考える素振りをする女性。

明らかに怪訝な表情である。

壁に掛かる、妙に秒針の針が動く音の大きい時計が七つくらいの音を刻んだ頃、女性は何やら閃いた様に声を上げた。

「ああ、すまない。名前を名乗っていなかったね。私はまだらめひるな駈目蛭茄。」

「……駈目さん。」

「堅苦しいじゃないか、相棒。蛭茄でいい。ひーちゃんとかでも私

は一向に構わない。むしろ、その方がいくらいだ。」

大真面目に訳の分からない独特の調子で話す蛭茄。

自称ひーちゃんには特に触れずに取り敢えず、喜太郎は疑問を先にぶつける事にした。

「特殊事件捜査課って？ それにさっきの現場は？」

「特殊事件捜査課、通称『怪異課』。私達は普通では考えられない事象により引き起こされた事件を捜査する。」

「そんな課、聞いた事」

「だろうね。正直、結果解決したが、公表できない。何て事は間々あるからね。」

「でも何故、俺がそんな課に？」

「さあね、それはもつともつと上の人間に聞くといい。私は人事担当ではないからね。」

「そうです、か。」

「それよりも、先程の現場。君は運が良い。初めて関わる事件があれ程の怪異とはね。」

「あれって、事件と言うよりも動物か何かの仕業じゃ？」

待ってましたとばかりに蛭茄は、細く艶やかな黒髪を掻き揚げ、緑がかつた深い黒眼を輝かせながら、現場から持ち帰ってきた毛髪の入ったケースを春水の前へと差し出した。

「これはね、狼の体毛だ。」

「……狼。なんであんな所に……。」

「えそおおかみ 蝦夷狼、学名 *Canis lupus hattai*。絶滅されたとされる種だ。」

「街中に絶滅種の狼が？」

「それだけじゃない。さらに興味深い事に残された血液は二種であるのに対し、残された毛髪は四種。蝦夷狼の体毛を含んでね。」

「えっと、それは一体？」

「現場には少なくとも三人の人間と、一頭の蝦夷狼が居たという事

だ。その内の二種の毛髪は血痕の残された二名の被害者の物だ。」
「それは、狼を操って、人を殺した人間がいると言う事ですか？」
「はは、君は中々に頭が柔らかいな。そうかもしれないし、そうではないかもしれない。」
「それはどういふ……。」
「蝦夷狼と、謎の第三者が同一人物かもしれない。って事さ。」
「そんな馬鹿な事」
「ルー・ガル……。」
蛭茄の瞳が妖しい輝きを湛^{たた}える。
真剣な表情をしている様で、どこか綻^ほんでいる様な不思議な表情。唇が乾燥しているのか、表面の薄皮を歯で擦るようにして引き千切る。
零れた舌先がやんわりと乾いた唇を湿らせた。

「現場でも、その言葉……。」
いつの間にか、自分では気づかない内に自分は怪異に取り込まれている。
何故だかそう思った。
ハツとして、正面を見やると、窓硝子に映る自分の顔が少し綻んでいる。
少し吊り上った自分の頬を小刻みに震える手で押さえ込むように擦った。

「ルー・ガル、ウエアウルフ、ライカンスロップ、狼男……。呼び名は数多あるが、満月を見て変身するアレと言えば、想像はでき

るかな？」

薄汚れたビーカーにお湯を沸かし、コーヒーを淹れながら蛭茄が咳く。

ビーカーから試験管に移されたコーヒーらしき黒い液体は、とてもではないが気分よく飲める代物ではない。

「狼男って……。犯人は狼男だって言いたいんですか？」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない……」

猫舌なのか、蛭茄はいつまでもコーヒーに息を吹き掛け、飲む気配はない。

春水は、蛭茄が口にするまでは絶対に飲むまいと心に決めていたので、コーヒーに手をつけないうまま、置かれた蝦夷狼の体毛が入ったケースを睨みつける。

「私が気になるのは、ルー・ガルの動機だ。被害者は現場に残された遺留品から考えて、社員風の中年の男に、巻き込まれたと思われる若い学生に共通点はない。」

「巻き込まれた？何故そんな事がわかるんです？」

「喰い残してあったからさ。犯人をルー・ガルと過程すれば、動機として最も濃厚なのは食欲。社員風の男は衣服や、毛髪、骨以外はほとんど綺麗に食べられているのに対して、学生の方は頭が齧かじられた位で、後は爪で引き裂かれたりしただけで原型は留めていないにしろ、肉塊の殆どが現場に残されていた所を見ると、食べる為に殺したとは考えにくい。」

春水は胃酸が逆流するのを感じて、近くにあった大きめのビーカーを予め、自分の近くに寄せておく。

「そうすると、社員風の男を食べている所を、学生に見られたので、殺した。と、そう言う事ですか？」

「普通に考えれば、そうなのだが。何か引つかかる様な気がする。」

「まあ、この推論も犯人を狼男と過程してある時点で普通に考えて

はいないと思うんですけどね。」
完全に冷め切ったコーヒーを少し口に含み、訝しげに首を鳴らす蛭
茄。
後を追う様にして口に含んだコーヒーは、苦味と渋み、そして少し
だけ薬品の臭いがした。
しばしの静謐せいひつの時間が流れた。

春水は取り敢えず、持ってきた荷物をデスクと呼ばれた木の台に広
げ、整頓せいとんを始めた。

物想いに耽ふける蛭茄は空のコーヒーカップ。正確には試験管だが、を
口に当てたままでいる。

「喜太郎捜査官、今日は帰りたまえ。」

「え、まだ昼前ですが？」

「刑事に昼も夜もないだろう。何かあれば連絡する。それではまた
な。」

蛭茄はそう言って奥の扉の中へと消えていった。

後に残された春水は整頓を終え、警察署内の道すから研修を受ける
同期達に少し後ろめたい気持ちを抱きつつ、その場を後にした。

家に着いて、そのままベッドに横になる。

来ていたスーツと髪が少し薬品臭い。

昼間の現場と蛭茄の言葉を思い出す。

都会の少し裏側。

暗がりの奥で起こった惨劇さんげき。

犯人への手掛かりは残された絶滅種の狼の体毛と、被害者以外の第

三者の毛髪。

「ルー・ガルー……、狼男……か。馬鹿馬鹿しい。でも……蛭
茄さんは、変な人だけど、美人だったな。おっぱいも大きいし……。」

急に疲れが噴き出し、雪崩の様な眠気が瞼を襲う。

瞼の裏に浮かぶ惨劇は、塗りつぶされる様にピンクのレースへ。

身体についた薬品の臭いのせいなのか、あのコーヒーはやはり普通の
のコーヒーではなかったのか、深い眠りについた春水が目を覚まし
たのは翌日の早朝だった。

部屋のデジタル時計に手を伸ばすと表示は五時。

「まだ眠れるな……。」

そう思つてハツとした。

「あれ？ そういえば怖い夢、見なかったな。」

悪夢に魘うなされなれないのは数年ぶりの事だった。

十四時間近く眠っていたにも拘かからず、再び布団を深く被って目を閉
じた。

するとけたたましく鳴り響く携帯電話。

「はい……、もしもし、こちら依賀春す。」

「ルー・ガルーだ。場所は、だ、すぐに来い。」

「え？ 蛭茄さん？ 何で俺の携帯番号……。」

既に通話終了の悲しげな音が電話口に鳴り響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5973y/>

怪異帖

2011年11月18日06時14分発行